

地方文学成立の条件

—山梨における近代文学の軌跡をめぐって—

塩 野 雅 貴

一

「地方の文学」あるいは「地方文学」という言葉がある。両者にはその内包に微妙な違いがあるが、共通するのは「中央の文学」との相対的把握の中で位置づけられた、地方に在住する作家や詩人による、地方での文学活動および活字化された作品群を意味するといふ点である。したがって、中央の作家の、特定の地方を素材とした地方色濃厚な作品でもそれを地方の文学とは呼ばないし、地方に在住する作家の、その地方で発表した作品が彼の周辺を素材としなかったり、あるいは地方的特色を持たなかったにしても、それはやはり地方の文学と呼ばれる。

地方の文学が中央の文学との対比の中で位置づけられるところには、明らかに中央の優位性が認められるが、そこに近代文学の成立とともに生じ、現在もなお形は変わりつつも隠然たる力を持つ中央文壇の存在がある。

周知のように、明治期に入ってから出版界は、多種類、多部数

の発行の傾向を増幅する過程で、執筆者の東京への集中を生んだ。もちろん、これは政治・経済の動きなどさまざまな要因による文化の一極集中の一環であるが、出版が経済行為として利潤を旨し、文学が活字化され読者に享受されることによって初めて社会的存在としての意義を生ずるといふ性格のものである以上必然的な流れであって、発行者と作家との緊密な関係は、心理的にも物理的にも深ければ深いほどそれに越したことはない。明治期における博文館や春陽堂あるいは読売新聞と文学界との関係はその顕著な例と言つてよいだろう。

このような傾向は、結果として出版界と深い関係を持つ実力者たちを中心とした「文壇」を形成した。「文壇」は、辞書的には「作家や文芸評論家たちの社会」という、同業者たちの横のつながりの意味合いが強い集まりであるが、出版ジャーナリズムが極度に発達した現在と違って、明治期には師弟関係を縦軸とした人のつながりが強いものとして成立していったようである。いわゆる文学結社の集まりの全体と考えられようか。したがって、文学に志した者は、

ある結社をとおして文壇への参入を許されることによって作家と認められるのが一般であつて、そこには師の意志が強く作用したわけである。

例を本県に關係のある作品にとつて右の事情を確認してみよう。

「笛吹川」は、明治二十八年の五月から七月の間、読売新聞に連載された中編小説である。その後春陽堂から単行本として出されているが、いずれも作者は「なにがし・紅葉山人」の合作となつてゐる。笛吹川畔に閑院する若い医者を主人公とした恋愛小説であるが、風景描写も心理描写も加えて文体そのものもいかに荒く、文章を練りに練つた紅葉の手が入つてゐると思われぬ。「なにがし」が書き、それに紅葉の名を冠して発表したことは明らかであつて、その「なにがし」が当時二十五歳の田山花袋であつたことも究められてゐる。花袋が文壇への参入を志して、文学界の実力者尾崎紅葉の門を叩いたのは明治二十四年、二十一歳の時であつた。以降、硯友社の一員として遇され、先輩たちの間にあつて文学修業を積んでいた時期の作品が「笛吹川」であつたわけである。師の名前を冠することによつて作品の発表が許されるという状況は、すでに江戸期にその萌芽が見られるのだが、近代文学成立期の文学界の性格の一端を物語るものであつて、例は「笛吹川」にとどまるものではない。合作とまではいかなくても、師の推輓なくしては独り立ちした作家とはなり得ないということである。尾崎紅葉と硯友社、坪内逍遙と早稲田文学、徳富蘇峰と民友社と挙げていくと、幸田露伴・森鷗外というような独立した高峰を別として、多くの文学志望者たちは、それぞれが結社に属し、結社の主宰者によつて発表の場を紹介され、その結果によつて文壇の一員としての地位を確立するといふ

構図に組み込まれるのが一般であつた。

ただ、樋口一葉の場合はこの構図からやや外れている。これも周知のように、彼女が『文学界』に発表した「たけくらべ」は、『しがらみ草紙』の「三人冗語」で露伴・鷗外の両大家によつて激賞された。このことを彼女がどれほどの感激をもつて迎えたかは日記に明らかである。気鋭の青年たちの同人誌『文学界』に作品の発表を誘われたことは、彼女の本格的な文学活動の第一歩であつたが、両大家の推奨は独り立ちできる作家として認定されたことを意味する。「たけくらべ」が引き続き『文芸倶楽部』に一括掲載されて、彼女は当時の文壇の新星としての位置を確立したのである。師弟關係こそなかつたが、露伴・鷗外の推輓によるところ、これもまた形を変えた文壇参入の姿であつた。

近代文学の發展とともに成立した中央文壇は時代とともにその様相を変えた。大正期から、かつての実力者の役割を、主として編集者が代わつて負うようになったのもそのひとつである。しかし、中央文壇と文学志望者との間にある基本的構図に変化はない。例えば、中央の雑誌に作品が掲載されることや、一流と言われる出版社から作品が上梓されることが文学志望者の願ひである点に変わりはないのである。近年になつて、文壇の崩壊が言われたことがあるが、それもかつての意味における文壇を指すのであつて、文壇そのものが消失したとは思われない。出版事情の変化が、自費出版をはじめとする、さまざまな作品の安易とも思える発表を可能にしている、である。

中央文壇の優位性は蔽として存在してきた。しかし、そこに加はることのみが文学活動ではないのも自明の理である。地方の独自性

ある文学の主張は当然あるはずであり、昭和四十年代ころまでの甲府あるいは山梨の文学界の動きは、ある意味でその点を軸にして展開していたと言えるようである。

二

近世以降俳諧・和歌を主として展開してきた山梨の文学界は、中央における小説・詩・評論による近代文学の成立に対して、その反応が遅かった。初期に、「新体詩抄」をふまえた「新体詩歌」の甲府におけるいちはいの発行、『北斗』『峡中文壇』などの同人誌での小説の試作や啓蒙的文章の掲載などが散見でき、その後、いくつかの同人誌や『山梨日日新聞』の「月曜文壇」「サンデー文壇」などに詩や小説が見られるが、いずれも字数が極く限られた試作的な幼稚なものであり、同時に散発的であった。本格的な意味での近代文学への脱皮は、詩における大正末期の『山脈』、小説においては昭和十年の『耕土』あるいは昭和十五年の『中部文学』の創刊あたりからと考えられている。反応の遅かったところには、山梨の歴史的風土のしからしむるところや地理的条件の制約が働いたと言えそうであるが、その点については後で考えてみたい。いずれにせよ、山梨において、中央の文学とのかかわりの中で地方の文学の独自性が意識されるようになったのは昭和十年代からであったようである。

近代文学とともに成立した中央文壇を視野に置いて山梨の文学人たちのたどった道は、大雑把に言うことを許してもらえらば、おおよそ三つに分けられるようである。ひとつは、ひたすら中央文壇への参入を志して修練を積みつつ、中央文壇人との個人的なつながりを求め、中央の動きに敏感に反応していった人々の道である。

他のひとつは、前者と同じ努力をしてみたものの、機会と才能に恵まれなかったため、様々な心理的屈折の果てに、文化的サロンとも言える世界に身を処していった人々の軌跡である。もうひとつは、中央文壇への参入を初めから拒否したりあきらめたりした人々のたどった道であって、この人々の文学活動は前二者とその場を同じくするが、基本的には自分の属するこの地方に独自の文学を生み出すことを目指していた。

以上は図式的な整理であって、三者の相違が明確な線で画されているわけではない。中央文壇を視野に置く点では共通しているが、その置き方はひとによって、また同一人でも時によって千差万別である。人はそれぞれの思いを抱きながら、ある時は同人誌の発行を契機に結集し、ある時は感情の食い違いによって別れたりする。

この人々が、強弱の差こそあれ、意識しあるいは意識せざるを得なかった「地方の文学」とは何であったか。この点に関して、時代が下がつてその時代特有の現象が現われているが、問題の本質はうかがえると思われる昭和三十三年発行の同人誌『中央線』創刊号の「座談会 地方の文学を語る」（甲府市史料編現代Ⅰ 史料二二九）の中の発言のいくつかを抜き出してみよう。引用中のA氏は小説、B氏は詩、C氏は文化活動をとおして、甲府を中心にした文芸活動に影響力の強い人々である。

「A氏 今での人達の文学に対する観点というものは大変かわって来ていると思うんですが。また、都会と地方の文学と云ったものも、立場の相違でそれぞれ異うんではないでしょうか」。

「B氏 僕は地方に居ても別に変わらないと思いますね。要するに掴み方がむずかしいでしょう。結構東京から来て、地方のこと

を小説の中でこなしている人も居るんだから。ローカルをどう消化するかが肝心だと思う。舞台としては使うだけではダメじゃないか」。

「B氏 今では農村でもラジオを聞き、電気洗濯機を使っている。着る物にしても食べるものにしても、余程遠隔の土地でないかぎり、それほど消費生活面では相違がないし、生活改善も進展している。農村の特殊性というものが大分希薄になっていると思いますね。ですから農村を描いたからと云って、あえて『農民文学』というような呼び方をしなくてもいいと思うんです。むしろそういう概念やワクを捨ててしまった方がいいんじゃないか。深沢七郎氏のものにしても、あれは農民小説じゃないですか?」。

「A氏 僕は、農村の文学が育たなかったということとは、要するに地方と中央との距たりが失くなったというふうに見ているんです」。

「C氏 さっき農村に都会的な形があると云われたようだが、僕は、それは形が似ているだけであって、本当は異質なものだと思えます。農村の自然環境や伝統と云ったものは、同じように見えても異うと思う。必ずしも農村が都会化したものとは云えない。農村に於ける農民というものは、そう簡単に伝統から抜けられるものではないですよ。地方の問題はもっと深く、単に形だけでなく、その底にあるものを見つめなければならないと思う。その異質を確認すべきだと思いますね」。

各発言が、中央⇄都会、地方⇄農村という図式的認識を根底に出ているのは、昭和三十年代前半の社会状況からして当然と言えるし、また、地方の文学を農民文学に置き換える把握の仕方、そこから生じた当時の文学界の動きによるものと言えるだろう。

ところで、引用した発言はA・B氏とC氏の二つの立場に整理す

ることができる。前者は、地方（農村）の生活様式が都市化するにつれて地方の特色が薄らぎあるいは消滅していく、したがって、地方の文学はその存在意義を失って衰退し、中央の文学との差異を意識する必要がなくなる、とするものである。後者は、確かに生活の都市化は地方の特色を失わせるが、それは表面だけの変化であって、農民（地方人）がその地の自然環境や伝統の影響を簡単に払拭するわけにはいかない、したがって、地方の文学はその底にあるものを見つめて、都会との異質性を確認するところに存在の意義がある、とする。一見すると、両者は地方の文学の存在意義をめぐる肯否それぞれ代表的認識を示していると言える。

しかし、例えば前者の「深沢七郎氏のものにしても、あれは農民小説ではないか」という発言は、座談会席上でのその後の論議の展開がなく、発言者B氏の認識レベルも不明だが、その意味を次のように理解することができる。

生活様式の都市化によって、素材としての農村（地方）の特色が薄らいだ。だが、都市と農村という対立的構図で捕らえられるものは時代の現象にしか過ぎず、根底にある日本人あるいは日本社会の本源的性格は確固として歴史的風土を形成しつつ存在する。そこに向かって掘り下げていくと、変貌の激しい都市の中ではなく、伝統と因襲の作用の強い地方農村の人間の生きざまに到達する。そこを描いた時、農民小説は都市と農村の枠を越えた普遍性を獲得するのだ。それが深沢七郎の文学である。だから、地方にあって地方を描いたからといって、ことさらに「地方の文学」として中央の文学に対比させる必要はないし、単に地方を舞台としただけの作品には存在の意義がないことになる。

概略以上のように理解できるとすれば、座談会における二つの立場は一見対立するようでありながら、地方の独自性を追究するという同じ根に拠っていると言えるようである。ただ、「地方の独自性」という言葉の内包をどのレベルで抜き出しているか、言い換えれば、「地方の文学」の存在意義をどういうレベルで問題意識としているかという点から生ずる差異があるのだということである。

三

中央集中を必然的状況とする近代文学の展開の中で、一方に文壇の一員としての声望を得ようという中央志向、他方に独自の地方の文学を形成しようという地方志向、この二つの矛盾した方向性をどう克服あるいは調和させて、地方文学人としての存在意義と充足感を獲得するか。昭和十年代あたりから、山梨の文学人に次第に意識化されてきたこの課題は、時により人によって、意識化の強弱、方法の違いなど様々な変化を生みつつ、極めて解決のむずかしい課題として模索され続けてきた。

「(略)中央文壇に地理的に遠く住む我れ我れは、色々な意味で不利な条件の中にある。これを克服して水準に追いつくことは只さへ大変な仕事である。地方には地方的特色もあらうけれど、中央の水準へ追いつき追いつ越せた場合にのみ地方的特色は生きもし、勝利もあり意義もある訳で、投げやりの中にはけっして地方的特色の成果はあり得ない(略)」

引用文は昭和十七年十月発行の「第一次『中部文学』第十輯」中の「同人通信」欄における山田多賀市の文章の一節である。山田はこの時雑誌発行実務の責任者であって、寄せられた原稿の整理、印

刷所との折衝、配布、販売などを担当していたようである。当然、同誌に対する中央文壇人や地方読者の反応をとらえ易い立場にあり、彼の発言はその情報に基づきながら、恐らく主要な同人たちが抱いていた思いを文字にしたものと推察される。

『中部文学』は、第一次が昭和十五年から二十年、第二次が二十一年から二十三年、第三次が三十年の一冊のみ、第四次が三十九年以降の発行となるが、現在は休刊中である。この間の発行状況は、創刊当初の隔月刊の原則が次第に崩れて、第四次に至ってはほぼ年刊という状況であり、総発行回数は必ずしも多くない。しかし同誌が、創刊以来同人の結束が固く、休刊期が幾度もあるものの一貫して独自の地方文学の存在を示し続けてきた点は高く評価されよう。

同人誌維持の最大の障害は発行経費の捻出である。同人誌に販売収入は期待できない。同人が経費を負担するのは当然としても、そこには自ら限度があるわけであって、経費の負担を主とする理由によって雑誌の創廃刊が繰り返され、それとともに同人の離合集散が行われるのが一般である。この点『中部文学』の存在は、第一次の山内一史、第二次以降の、発行所甲陽書房主石井計記に負うところが大きかった。加えて、小説の石原文雄・熊王徳平・村上芳雄・山田多賀市・中村鬼十郎、評論の相田隆太郎・臼井常夫、詩の杉原邦太郎・瀬谷・宮田樗夫など、力量と声望を備えて山梨の文学界の中心になっていた人々が、長く同誌を支えて活動を続けてきたことも見落とせない。この人々は、すでに亡き人も現存する人も、生涯文学から離れることのなかった、あるいは離れないはずの人々であって、甲府を主たる場として小規模ながら地方文壇と言えるものを形成していたのである。

彼らが、山梨に「地方的特色」のある文学を生み出そうと願っていたことは、前記山田多賀市の文章の中に明らかである。しかし、山田の言うように、中央文壇に地理的に遠いことから生ずる不利な諸条件の中で、「地方には地方的特色もあらうけれど、中央の水準へ追いつき追いつ越せた場合にのみ、地方的特色は生き」もするという認識を具現化する作業は大変なことである。

いったい、「中央の水準を追い越した地方的特色が生きている作品」というイメージはどんな条件を備えることによって可能なのか。概括的に言えば、まず当然のこととして、素材が地方に求められることが基本にある。それも、中央の亜流になることを避けるためには地方都市よりも農村が主になることになろうし、その農村は山梨の風土を形成するものとして他の地方にない特色が把握されたものでなければならぬ。第二に、その素材が十分に消化され深化されて、結果として人間の典型としての普遍性を獲得していなければならぬ。ここにも特殊に徹するものが普遍を獲得するという論理が働くのであって、例えば「深沢七郎の作品も、あれは農民文学ではないですか」という前述の認識の拠って立つところであろう。第三に、前二項を可能にするための、作家自身の個性的な世界観の確立と鋭敏な洞察力の養成、加えて斬新な手法と表現力の修練、言い換えれば、作家としての資質の高まりが背景になければならない。

地方同人誌の水準の、集団的な意味での向上は多くこの点にかかわってくるのであって、そこに、属する地方の独自の風土性が同人誌の持つ特色として現れてくることになろう。以上三点のうち第一はともかくとして、第二、第三の点の克服は、作家としての生来の資質をある程度備えていると仮定した上に立つても極めて難しいこ

と云々ざるを得ない。また、仮にある程度中央文壇の水準に達した作品を生み出したとしても、それが文壇によって秀作と認められるのには別の力の作用があるはずである。

最近、山田多賀市の編集・発行になる雑誌『農民文学』が復刻されて話題になった。同誌は昭和二十六年九月の創刊から昭和二十八年までの間に九冊が刊行され、戦後の農民文学の先駆としての役割を果たしたと評価される雑誌である。山田は創刊号の冒頭に「この雑誌はなぜ作り初められたか」という小文を載せた。彼はそこに日本の農民文学の作家も作品も下手くそでちっともおもしろくないと書いた後「今の日本にはブندانと云う、いづれ農民とは何のつながりもない、へんなものがあつて、そこへ集まつている人達は自分たちのことだけしか、考えることのできない心のせまい人が、おおいのに合せて、雑誌や本を作つて売る、出版屋さんたちは、心がせまい上にタチの悪いやみ商人のように、やたら目の先の欲がふかくて（略）」と述べている。創刊の昭和二十六年は、戦後復刊された『中部文学』が二十三年に休刊、三十年に再刊される間に当たった。『中部文学』の休刊という事態の中で、当特別に刊行中の農業技術誌『農業と文化』の売行きの好調さによって経済的に余裕のあった山田が、新たな文学活動の場として刊行を始めたのが同誌であったと言える。

山田が一方で、農民文学と限定しながらも作家も作品も下手くそで面白くないと周辺の現状を否定し、他方で、中央文壇およびそれを支える出版界を自分たちだけのことしか考えていないと否定しているのは、一見自暴自棄とも思える発言である。しかし、ややもすると、中央文壇の厚い壁に突き当たって仲間うちの自慰的世界に陥

りがちな地方作家の位置と、かつては彼が積極的に参加していた『中部文学』の不振とを背景に置いてみると、まさに地方作家としての歩みが閉塞状況に直面していた結果であると言えそうである。

『農民文学』の刊行を新たな可能性への出発ととるか、あるいは地方作家としての挫折ととるか、その評価はさておくが、いずれにせよ、「中央の水準を越えた特色ある地方文学の確立」という願いが、内部的には作者および作品の質の向上、外部的には中央文壇の優位性の克服という極めて解決困難な課題によって、その道を狭められていたことを示している。

詩人一瀬稔の「太宰治点描」という小文の中に次のようなエピソードが語られている。

「『僕はどんなに落ちてでも田舎廻りだけはしないつもりなんだ』。ある時、これも逝くなつた『中部文学』の山内一史が、太宰さんに『中文』へ何か書いてくれないかと云つたら、太宰さんは即座にそんな風な返事をされたのを私は傍にいて耳にしたことがあつた。その時酒のせいもあつたらうが、いかにも傲然とした態度で太宰さんは云ひ放つた。己を高く持するためのプライドというよりも、名声の出できた太宰さんにとっては、今考へるとそれが一つの自己保身術でもあつたように思われる。」

地方の雑誌に書くことは、折角手に入れた名声を維持するための傷になる、文学者の舞台は中央文壇にこそあるのだから、という一瀬の解釈は恐らく的を射ていよう。太宰という個性がそれを傲然としたスタイルを装つて言わしめたのであろうが、恐らく甲府の飲屋の一角でのその場に、一瞬であろうとも白けた空気が流れたに違いない。「田舎廻り」という言葉の持つ中央中心地方蔑視の通念がこ

こにも現れている。文学の中央集中とはこういうことであり、中央文壇を視野に置く地方の文学活動の前に立ちはだかる壁であつた。

高度経済成長期と言われる昭和三十年代末から四十年代にかけて、山梨の詩界が完全に沈黙し『中部文学』の再刊も話題に上らないままでのころ、熊王徳平は「東京へ出たい」という小文を書いた。

「東京へ出ようかな、東京へ出て一発やろうかなと、炬燵の中でいま、私は毎日考えている。これはテレビ作家の竹内勇太郎君と、ルポライターの竹中芳君からの刺戟によるもののである。

竹内君の『女侠曼陀羅』は、近く、清川虹子の主演で、新宿コマ劇場で上演されるという。すばらしい話だ。竹内君は万一甲府にまごついていたとするなら、これはどの劇作家には成れなかつただろう。（中略）

芳君が東京へ出てジャーナリストにと聞いた時私は、あの文章でと危ぶんだものである。十五年も昔の事だ。それが磨きに磨き上げられた近ごろの文章のすばらしさはどうだ。芳君は、きびしい中央のジャーナリズムの中で、完全に叩きに叩き上げられ、鍛えに鍛え上げられた。今や私は頭の下がるばかりである。わが友・竹中芳君よ。本当に君は、甲府にまごつていなくてよかった。

そうして、こう書いては失礼だが、父上の竹中英太郎はどうしたことであろうか。往年の竹中英太郎とは、あの岩田専太郎と並び称せられたさし絵画家であつた。それが敗戦後、甲府に根を下ろしてしまった。甲府とはよほど住みよい街であるらしい。しかし私は、それが無念でならない。（中略）

これは英太郎君のことばかりではない。秋山恵三と言っても、甲府盆地にはもう知る人は少なからう。恵三君は甲州の地を後にして

三十年、仙台に住んでいる。昔『文芸』に『新炭図』が載った。近年二回も芥川賞候補にあがっている。それほどの才能を持ちながら恵三君は、今なお、脚光を浴びていない。これはどうしたことであるのか。私は思うのだ。恵三君はいったん東京へ出ながら、仙台なんて遠いところへ行き、そこに家を建て、尻を据えてしまった。これがいけなかった。(中略)

そうして、決して私は竹中英太郎と秋山恵三を笑えない。むしろ悲しむ。それは自分だ。って同じではないかと考えるからである。

(後略)」

四

極めて克服困難な課題を前にして、なお悪戦苦闘を続けるか、潔く撤退して別の道を求めるか、それとも沈黙するか。甲府を中心とする山梨の文学界、特に近代後期の小説界の歴史は、さまざまな人が描く錯綜した軌跡を示している。そして現在、かつて盛んに活動していた人々は物故あるいは沈黙し、少数の若い文学志望者たちが幾つかの同人誌の灯をともし続けて一時代前と同じ道を歩んでいるに過ぎない。文学界の主流になっているのは、近世以来の伝統を持つ短歌俳句など短詩型の文学である。

ここに至る過程を、政治・経済・文化など日本社会のあらゆる仕組の東京集中傾向の、加速度的増幅の結果だとして一括してしまうことは容易である。ことは山梨だけに留まるまい、全国至るところの姿なのだという声が聞こえてきそうである。だが、時代の趨勢に対する地方文学者の主体的対応の仕方は、彼の属する地方が持つ風土の独自性によって異なるはずである。その点をふまえ、中央との

かわりは結果として指定するという姿勢によって山梨で独自の文学活動を展開した例は求められないか、という問いは可能と思われる。その答えが、山梨における近代詩の展開であり、展開を支えた山梨の文学風土であったと言える。

和辻哲郎は『風土——人間学的考察』の中で、人間の存在の根本には、主体的な意味における空間的・時間的構造があるとした。主体にとつての空間とは「風土」であり、時間とは「歴史」である。そして、歴史は「風土的歴史」であり、風土は「歴史的風土」であるという相互が不可分な構造にあるとする。彼がこのように「風土」を第二の自然としてのみに規定したことには、例えば人間の経済的側面、特に生産の場が顧慮されていないなどの批判があったようである。確かに、人間の生の営みにとって、地形や気候に代表される地理的条件としての第一の自然の制約は大きい。文化的行為の主体が和辻の言う「歴史的風土」に負うところが大きいにしても、やはり、地理的条件を除外できないのは当然であろう。

山梨あるいは甲府の風土の形成に、武田・徳川にわたる支配体制とそれへの民衆の対応という歴史と、生産性の低い土地と山地に囲まれたための交通事情、寒暑の厳しい気候等が作用していることはよく言われるし、そこから、いわゆる県民性と称するものも話題に上る。文学をはぐくんだり享受したりする精神的土壌を文学的風土と呼ぶならば、山梨はその形成にとつて恵まれた条件を持たないどころか阻害する条件が多いとさえ言えるのである。

この点に関して、内陸県として気候、地味等の恵まれない地理的条件が似通い、近世の支配体制は山梨より以上に厳しかった群馬県と比較してみよう。

群馬県史によれば、明治初年の上野国の領有状況は、幕府直轄領、前橋藩以下七つの藩領、淀藩以下十一の国外諸藩領、百名を越す旗本の知行地等に細分され、その領界の線は網の目のように見える。

加えて、それまでに領主の交替、領界の移動がしばしば行われてきた経過をも持つ。また、江戸中期以降の小藩や旗本の財政難が、支配地の農民への苛酷な収奪に向かっていたこともよく知られていることである。幕末に博徒と呼ばれる無頼の輩が数多く現れている点は山梨以上であるが、生産性の低い土地と、程度の差こそあれ収奪を主とする支配体制に組み込まれてきた結果であるところは似ている。目先の利益追求と権力への迎合、その反面の反権力的気風が民衆の間に形成されざるを得ないゆえんである。

このような不利な地理的条件を含めた歴史的風土が、文学の姿にどのような特色をもたらしているだろうか。そのひとつに群馬には散文文学が育たなかったことがあげられよう。館林出身の田山花袋はいるものの、彼は二十一歳で上京して以来地方の文学に関与することはほとんどなかった人である。逆に、群馬は近世以来俳諧和歌の盛んな伝統を持っている。その底辺の広がり、あるいは山梨以上であったかも知れない。例えば、建立された芭蕉句碑は二百十九基に及び、その数は圧倒的に全国一位であるという。ちなみに山梨の場合は奥山正典氏によると六十二基である。また、群馬は近代前期のいつごろからか「詩の国」と呼ばれていたそうである。それは、近世以来の伝統に加えて、秀れた近代詩人が輩出したことによるらしい。古く湯浅半月から始まって、平井晩村、萩原朔太郎・山村暮鳥・大手拓次・萩原恭治郎・高橋元吉・伊藤信吉らがその人々だが、いずれも日本の近代詩史に光彩を放っている人々である。

散文文学が育たなかったところに群馬の文学的風土の特色を仮定するのは早計であるかも知れない。しかし、生存にとってあまりに抵抗の多い貧しい環境には文化は生まれえない、ほどよい負荷による精神の緊張こそ文化を生む源泉である。散文文学が生まれ享受されるためには、それを支える底辺の広い文化的基盤が必要だろう。群馬にはその文化的基盤を形成する条件が乏しかった。歴史や地理的条件が全く違う加賀金沢に、泉鏡花・徳田秋声・室生犀星らを想起すると、前述の仮定が必ずしも的はずれとは思われないのである。

このことは、群馬と似通った条件下にあった山梨についても言えることである。山梨における近代の散文文学は、早く中村星湖を生んだ後、大正末から昭和初年になって、星湖や前田晁の指導下に『中部文学』の作家たちが育てられるころから本格化する。しかし、彼らの初期の作品は、反体制、反権力の新しい文芸思潮であるプロレタリア文学のイデオロギーが未消化のまま綴られた観念的なものであって、当時『山日』文芸欄の選者であった中村星湖は投稿作品に困惑したという。つまり、彼らの文学活動は山梨の風土とは関係ないところから出発したのであって、地についたものになっていくのにはその後数年を要したのであった。これは、山梨における近代詩の本格的展開に比すると約十年の遅れであった。

ともすれば趣味と教養の世界に陥りがちな短詩型文学の伝統を根に群馬や山梨の近代詩は展開したが、その様相にはかなりの違いがあった。群馬が「詩の国」と呼ばれるにふさわしい詩人たちを輩出したのにはどのような背景があったか。ここでは詳らかにできないが、ただ、彼らの活動が中央詩壇と郷土との両地にまたがって行われたことがその答えの手掛かりになり得よう。現在、上野前橋間が

特急で一時間三十分、距離的には新宿甲府間と大差ないが、同区間の鉄道の開通は前者が明治十七年、後者が明治三十六年である。加えて、関東平野をひた走ると山また山を越えるのでは所要時間に大差があった。しかし、中央と地方の間の移動が易しいということだけでは彼らの文学活動の説明にはならない。彼らの郷土での活動をうながしたのは底辺の広い詩愛好者の存在であった。

『群馬県史』によれば、大正期だけで前橋中心に十三の同人詩誌の名が挙がっている。そこには前記詩人たちの名が、主宰・寄稿・講師などとして見え、彼らとのつながりで、白秋・啄木・犀星らの名も見える。一部同人誌についての説明記述によると、地方詩人たちの自負心もかなり高かったことがうかがわれる。また現在、前橋市を中心に十人十六基の群馬出身の近代詩人の詩碑が報告されているが、そこに詩を愛する文学的風土が早くから醸成されていたのを見ることが出来る。

このような底辺の上に、中央詩（文）壇の優位性を乗り越えた「詩の国」の存在が確立したのだが、その先端にあつて日本近代詩史を彩った詩人たちの存在は、彼らの並外れた資質が郷土の文学に影響を与えたのだとするか、郷土の文学的風土が彼らの資質を開花させたのだとするか、恐らく両者の相乗作用によるものと思われる。いずれにせよ、前橋市を中心に、「中央の水準を越えた独自の地方文学の確立」という夢が、近代詩の展開をとおしてひとつの達成の姿を示したのであった。

山梨における近代詩の展開は、群馬の場合と様相は違うが、「地方的特色を持つ文学」の確立という面では少規模ながらひとつのまとまった姿を示している。その具体的な流れは『甲府市史通史編近

代』の「一大正期の文芸」に述べてあるが、生田春月という当時の中央詩壇では主流から外れている一詩人の影響下に、結果的には中央詩壇との関係を持たないままに展開したところにその特色がある。

春月と山梨の近代詩との関係は、市川大門の渡辺陸三や甲府の杉原邦太郎との個人的なつながりをきっかけとして生まれた。そして、東京で春月に学んだ杉原が帰甲し、大正末年に詩誌『山脈』を発刊するに至って、山梨で近代詩を志す大多数の人が結集し、生田派と呼ばれる地方詩壇とも言えるものを成立させたのである。この地の小説界の本格的活動の開始に先立つこと約十年であった。一詩人だけの影響下に地方都市に詩壇らしきものが形成されたことは、それが同人たちの意志によるものか、それとも結果としてそうなったのか今後の考究にまところだが、その独自さは恐らく全国の地方都市にその例を見ないだろう。杉原邦太郎を中心にした『山脈』は、その後『虹』『裾野』と誌名を変えつつ、昭和九年、宮田梅夫らによるモダニズム系の『豹』の出現までほぼ十年間、山梨の近代詩の展開における唯一の存在であった。

春月が昭和五年に自ら命を絶ち、その後夫人生田花世が本県とのつながりを保つものの、春月の影響は次第に薄らぎ、前述の『豹』の出現に伴って詩人たちの結束そのものも崩れていった。元来、気質も作風も異なる人々による組織は、求心力を失うと感情的対立の中で分解していく。この後の山梨の詩界が、感情的対立を主たる理由として離合集散を繰り返し、次第に活力を失って現在に及んでいるのは、かつての例にならっているかのようである。それもまた山梨の風土のしからしむるところと言えるかも知れない。しかし、『山脈』の存在が地方における独自の文学確立の可能性を示したこ

とは変わりない。

おわりに

平成二年二月に中村鬼十郎、同年九月に山田多賀市、平成三年八月に熊王徳平と、かつて山梨にあつて地方の文学の確立のために苦闘を続けた作家たちが相繼いで逝つた。あたかも生涯の文学の友といつまでも手をたずさえていたというようなあわただしさであつた。詩人一瀬稔は『山日』紙上で「時代は変わりつつあり、世代交代の時期にきている気がする。熊王君が亡くなって、一つの世代が終わつたというような気がして、実に寂しい」と語つた。現代のジャーナリズムや文学界の状況からすれば、彼らの求めた「独自の地方文学」は、すでにその活動の基盤となるものを失っているのだろうか。それにもかかわらず、中央志向を捨てることによって、山梨独自の、新たな地方文学の存在を可能にすることができるのだろうか。そのためには、和辻哲郎の言う「風土的歴史」を作りつつある現在が、文学をはぐくむ文化的基盤の養成からは遠くに動いているように思われてならない。

注

- (1) 岩波書店『座談会明治文学史』
- (2) 明治十五年甲府徴古堂より発行。『甲府市史史料編近代』参照。

- (3) 明治二十三年甲府提醒社より刊行
- (4) 明治三十年甲府有明義塾より刊行
- (5) 正確には第二次創刊号、第一次は前年に二号のみ出して終わっている。
- (6) 甲府農村文化協会発行の月刊誌、山田多賀市編集、全国各地に支社を設けた。栽培技術や農村婦人の啓蒙に関する記事が多い。
- (7) 昭和二十八年甲府山梨文化協会刊行の雑誌『文化人』第七集、内田一郎・熊王徳平の文と並ぶ「太宰治の想い出」の一節。
- (8) 山梨日日新聞昭和四十七年二月四日文化欄
- (9) 岩波文庫『風土―人間学的考察―』の中の井上光貞の解説による。
- (10) 『群馬県史通史編近世』による。以下群馬県関係の記述は「通史編近代3教育文化」によつた。
- (11) 昭和六十年刊『甲州の文学碑』
- (12) 主として「山日サンデー文壇」をとおした。
- (13) 上野頼三郎・山口啓一・内田義広・飯田安茂・中室員重・依田幸穂・佐々木宵吉・菊島茂義ら。
- (14) 宮田樗夫・長谷部林造・友田なつ・磯部為吉・米倉寿仁・比口嘉夫・曾根崎保太郎ら。

(市史編さん専門委員)